将来の発掘調査に備え、窯跡の分布調査・窯跡周辺の地形測量を実施しました。また相互研鑽を目的とした研究員交流も行なっています。

本年度の大きな事業は、これまで試掘調査や踏査で発見されている唐三彩を一冊の図録にまとめることと最近新しく見つかった唐三彩の窯跡の試掘、そして鞏義唐三彩に関するこれまでの研究成果の公開です。10月の末には平城・藤原両調査部のメンバーが中心となり、図録作成のための遺物観察と撮影に出かけました。中国版図録は本年度末に、日本版は2002年度に出版します。

11月の後半には、中国から孫新民所長他4名の研究者をお招きし、22日には、孫所長と陳彦堂副研究員に講演をお願いしました。一般の方々にも聞いて頂く予定でしたが、来日の確定が遅かったため、やむなく近在の研究者約30名にお集まり頂き実施しました。孫所長には鞏義唐三彩の研究成果を、陳氏には唐三彩が生まれる前提となった漢代多彩陶器に関する最新の研究成果をお話し頂きました。

（埋蔵文化財センター）

研究会の開催

第1回　瓦・磚の製作実験についての研究会

平城宮大極殿・大極殿院の瓦に関する研究会のうち、瓦・磚の製作実験について、第1回研究会を11月12日に奈良文化財研究所の小講堂でおこないました。当日は、研究所の内外から22名の方が参加しました。

討論の内容は大きく4つに分け、1）製作実験の目的・意義、2）生瓦を作るまでの技術的復元のあり方、3）窯の構築法、4）今後のスケジュールの順で話し合いがおこなわれました。

第一の製作実験をおこなう必要性については圧倒的に賛成意見が多かったのですが、瓦製作の実験的な試みと、実際に大極殿で使う使わないという問題とは、一応別立てにして検討すべきであるという意見でまとまりました。

第二の生瓦を作るまでの製作技法上の問題ですが、粘土の選択及び粘土自体の分析、粘土の練り方、桶状造瓦器具の製作法、麻布の織り方、布袋製作法、縄叩き原体の復元などが話し合われました。

第三の窯の構築法については、事務局（考古第三調査室）側から、中山瓦窯の最古の窯は階段式登窯であるので、同一形態の2基を、一方は日乾しレンガで作り、他方は硬化剤を入れて固め、その後くりぬくという案を提示しました。これに対し、藤原宮の時代の瓦は須恵質で、平城宮になると焼きがあまい（大極殿の瓦も同じ）という巨視的な見方からすると、階段式登窯ではなく、平窯的な登窯にした方が良いのではないかという意見が出されました。討論の結果、最終的に階段式登窯1基、平窯的な登窯1基を作ることで意見がまとまりました。

第四の今後のスケジュールについては、まだ未定の部分が多いので十分な討論ができなかったのですが、さしあたりこの第1回の研究会をふまえて、考古第三調査室が「瓦・磚製作実験の計画書」を作り、来年度からの具体的な手順・費用を示すことを約束して会を終えました。この会に参加していただいた多くの方々・関係者に厚く御礼申し上げます。

（平城宮跡発掘調査部）

木簡学会第23回研究集会

木簡学会は、木簡に関する情報の蒐集・整理、木簡そのものについての研究・保存、その成果の普及と史料としての活用を目的とするユニークな学会です。奈文研が1975年から3回にわたって開催した木簡研究集会を母体として1978年に設立されました。

12月1日（土）・2日（日）の両日、今年で第23回を数える恒例の研究集会が、全国から160名に及ぶ日本古代史・考古学・東洋史・国語学などさまざまな分野の研究者の参加を得て、奈文研平城宮跡資料館講堂で開かれました。

「墨書土器と木簡」（高島英之氏）・「都城出土漆紙文書の来歴」（古尾谷知浩氏）の2本の研究報告、「長岡京右京六条二坊の調査と出土木簡」（中

木簡学会研究集会の討論風景の一コマ